

## 久高島（沖縄）の八月行事から

小山和行

共同研究員／沖縄研究者

小山です。私は南島の島々でかつて行われ、今も行われている祭祀を中心に研究しております。特に、琉球王府と深いつながりをもってきた久高島での祭祀、人々の生活に関心をもってきました。最近二ケ年も、トヨタ財団の助成を受けまして、〈神の島〉と通称されております久高島の八〇年代の年中行事の映像記録をデータベース化する作業のプロジェクトに関わってまいりました。

本日も、その久高島の年中行事を通して、シンポジウムのテーマである「島のコスモロジーと想像力」についてコメントさせていただきたいと思っています。

小島先生のお話の中にも久高島が出てまいりました。いわゆる琉球神話の問題ですが、〈琉球王権と久高島〉という視点から、久高島の年中行事に触れながら申し上げてみたいと思います。

久高島では、年に三十回ほどの祭祀が行われてきたのですが、その中で特に、琉球王府、それとか

つては国王自身と深いつながりをもった〈麦の初穂祭り〉がございます（次頁「久高島の祭り」参照）。旧二月に、国王が三司宮や最高神女である聞得大君たちを伴って久高島に参詣し、有名なヘイザイホー祭祀<sup>きこえおきみ</sup>が主として行われる〈ウドウンミヤー（御殿庭）や、島のウタキの中でも最も大きな〈フボーウタキ〉を中心にして、自ら〈麦の初穂〉の祭りを執り行います。

この祭りは別名、〈ソージ（精進）マッテイ〉、あるいは〈マブッチ



こやま・かずゆき◎早稲田  
大学琉球・沖縄研究所客員  
研究員。

（握り飯）マッティ」とも言われておりまして、精進潔斎が厳しく課せられていることに大きな特色があります。かつて、国王が渡島していた際にも、対岸の、現在は世界遺産になっている、王国最大の「ウタキ（御嶽）」である「サヤハウタキ」の下の浜辺で国王は手を洗い清め、そこから船で渡ってきたのです。つまり、島側では既に島を挙げて厳しい「物忌み」に入っているがゆえに、国王も自らの身を清めてから、という形になるのかなと思います。

また、島に入ってきて国王はさらに「ヤグルガー」という島のノロさんたちが使用する「カー（井泉）」で手などを洗い清めて、それから「フボーウタキ」へ参詣する、という記事が残っております。

「麦の初穂祭り」が行われる時期は、一年の中でもとても天候が悪く、また久高島の近海は波が荒いものですから、参詣にはとても危険が伴ったのですが、なぜ、この時期に国王がわざわざ、それも毎年参詣したのか、ということが実はとても重要なことです。

実はこの時期は麦の受粉時期でして、つまり麦の「穀霊」が招き寄せられる時に当たります。ですから、未成熟の麦の成長を願って「穀霊」が無事に定着し、麦の穂が順調に成長することが大切なのでして、その成長を願って厳しい「物忌み」があると考えられるのです。

この「ソージマッティ」は、男性たちの健康祈願を目的としています。また、この祭りの期間中に「フバナフェー」（穂花拌み）という祭りが各家庭で行われ、女性たちが「マブッチ」という小さな握り飯を七個とか九個とかつくり、それをお供えしながら自らの霊的な力の強化を祈ります。ここでも麦の「穀

## 久高島の祭り

### 「イザイホー」

久高島で生まれ育った三十歳から四十一歳までの女性が神女として島の祭祀集団に参加する資格を与えるためのものである。「タマガエーヌウプティシジ」という祖霊を引き受け、その守護を背景にノロを頂点とする祭祀組織の一員となり、島の守護神の一神になると同時に夫や息子の守護神的役目を担う資格者（成り子）に就任する儀式である。（比嘉康雄）

ナンチュになった女性たちは七十歳の退役の儀式を迎えるまで年間三十以上の共同体レベルの祭祀と家レベルの祈りも行う。

### 「ハンジャナシー」

旧四月と九月の二回、十五日前後のミンニー（みずのえ、みずのと、きのえ、きのと）の日を選んで行われる。ハンとは神の意、ジャナシーとは敬称である。

「ハンジャナシー」は「アカハンジャナシー」ともいわれ、久高島の他界・ニラーハラー（ニライカナイ）の神々の総称である。このニラーハラーの神々が来訪して島を祓い清め、正人（十六〜七十歳までの男子）の健康祈願をする。

### 「麦の穂祭り」

麦の初穂儀礼「ミシキヨマ」は、「ソージマッティ」あるいは「マブッチマッティ」と呼ばれている。ヤグルガーでの「ソージ」を必修としている祭りとして精進潔斎が厳しく課せられていることに大きな特色がある。第一日目の朝拌み（朝マッティ）がこの儀礼の中核にあり、ノロ達をはじめ、マッティに参加する神子達はマッティ三日前から朝拌みが終わるまで豚肉を口にしない（三日ソージ）。精進潔斎して未成熟の麦の無事成長することと男達の健康を厳粛に願うのである。

霊」を招いていると考えられます。その「マブッチ」を家の男たちに食べさせ、彼らの健康の増進を願うのです。このことはまた、国王の久高島での「麦の初穂祭り」も同様の意味をもっていることを示していると考えられます。男子禁制である「フボーウタキ」にも国王だけは、オナリ神である間得大君たちとともに入りましたし、そこで儀礼が行われています。

久高島での「麦の初穂祭り」は、国家的儀礼としては、新たな「穀霊」が付着した「マブッチ」を食するなりして、国王が新たな「霊力」を、国王としての、統治者としての「威力」を獲得することに本旨があると思われます。そして、この祭りを背景として、久高島を舞台にした、「アミミキヨ」という女神による国土創造、穀物起源の神話が生み出されたものと私は考えております。

このように久高島は首里王府と密接なつながりをもっていたわけですが、先程の小島先生のご講演の趣旨に話を向けたと思います。

小島先生もご論文でお書きになってもいらっしゃるのですが、南島の正月は古くは八月であると言われます。久高島について考えますと、それは旧八月九日から八月十五日までほぼ一週間にわたる一連の行事を指します。八月十日の日に「ハティグワティマッティ」が行われ、「シバサシ（柴差）」があります。小島先生がご指摘のように、いわゆる「年の夜」大晦日」に当たります。ここで年が切り変わって翌日の十一日「ヨーカビー」が元旦となるわけです。

この日、昼頃、「フボーウタキ」から戻ってくる女性たちを男性たちが「ポーンキヤー」とよばれる「村境い」で迎える儀礼があります。八〇年代初めの映像を見ますと、当日女性たち



が「フボーウタキ」へ行つて、ウタキの中で神に祈願し、そして「イーチョハリーチョ」のティルルを話しながら円舞する神事があります。その後、村へ戻る、ということになっています。

しかしながら、一連の行事のプロセスをご覧になっていただきますと、九日の日に「フボーウタキ」へ女性たちはお参りし、そこで「シンチャメーヌフェー」（神の前の拝み）をやっています。この日から女性たちは「ウタキ」に「こもる」ことが本来であつて、いわゆる「二日タカベ（崇べ）」に相当するものではないか、と私は現在のところ考えております。「ポーンキヤー」で男性たちが女性たちを迎えるのも、いわば「サカ迎え」する儀礼とも考えられます。そうしますと、南西諸島に広く普遍性を追求できる視座をもちうるかな、と考えております。

時間ですので、一まずこれでコメントとさせていただきます、また討論の場でお話しできればと思います。